



第33回日本エイズ学会学術集会・総会

市民公開講座

性感染症と社会の未来

日時

11月29日（金）午後3時40分～午後5時10分

場所

熊本城ホール2Fシビックホール（熊本市中央区桜町3-40）

座長

満屋 裕明
吉村 和久

（国立国際医療研究センター研究所）
（東京都健康安全研究センター）

プログラム

1. エイズは今どうなっている？ ～エイズを克服する社会とは？

松下 修三 熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター

2. 性感染症は今どうなっている？ ～多様化する性行為と新たな性感染症

渡辺 恒二 国立国際医療研究センター エイズ治療研究開発センター

3. “性”の文化史―衆道を中心に

渡辺 憲司 立教大学名誉教授・自由学園最高学部長

4. パネルディスカッション

【問い合わせ】

熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター
臨床レトロウイルス学分野（松下研）

☎096-373-6536

予約不要
入場無料

市民公開講座

「性感染症と社会の未来」

日 時： 11月29日（金） 15：40～17：10（90分）

会 場： 熊本城ホール 2F シビックホール

【司会】 満屋裕明 （国立国際医療研究センター研究所）
吉村和久 （東京都健康安全研究センター）

【演者】

1. 松下修三（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）
『エイズは、今どうなっている？～エイズを克服する社会とは？』
2. 渡辺恒二先生（国立国際医療研究センター エイズ治療研究開発センター）
『性感染症は今どうなっている？～多様化する性行為と新たな性感染症』
3. 渡辺憲司先生（立教大学名誉教授・自由学園最高学部長）
『“性”の文化史―衆道を中心に』
4. パネルディスカッション

【趣旨】

ヒトの多様性、とりわけ性的指向の多様性を社会がどのように受け入れてきたか学ぶことは、エイズや性感染症の予防を考える上で大きな助けになります。社会におけるタブーやスティグマの克服は非常に困難に違いありませんが、性感染症の予防のみならず人類の未来にとっても大変重要な課題と言えます。今や、エイズ・HIV 感染症は、抗ウイルス療法（ART）の飛躍的進歩によって、治療可能な慢性疾患となりました。感染後早期の診断と速やかな治療開始が達成されれば、もはやエイズの克服も夢物語ではなくなってきました。しかしながら、現実には、HIV 感染者の 3 割近くがエイズを発症して初めて病院を訪れます。コミュニティや行政による早期検査の呼びかけにもかかわらず 3 割の方々は HIV 検査を受けなかったのでしょうか。その大きな理由の一つに、スティグマが挙げられます。これは、エイズに限ったことではなく、その他の性感染症も同様の状況であると言えます。最近マスコミを騒がせている、日本の若年層における梅毒の急増のみならず、多様化する性行為に関連して、さまざまな性感染症の流行が起こっています。国際化に突き進む日本でいま何が起きているのでしょうか。本公開講座では「性感染症と社会の未来」と題して、はじめに現在のエイズを取り巻く現状を熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センターの松下修三教授にご説明いただいた後、国立国際医療研究センターの渡辺恒二先生に、性感染症の日本における現状についてお話ししていただきます。そして、我が国において、「性」に関する文化的背景がどのようにして形成されたかを、日本における「性」の文化構造の特色に触れながら、とくにその最盛期である江戸時代前期の若衆における男色文化について、立教大学名誉教授の渡辺憲司先生にご紹介していただきます。渡辺先生は、近世文学が専門で、遊郭研究の第一人者としても知られ、タモリさんが街の歴史に迫る NHK 番組「ブラタモリ」にもご出演されています。人類の未来が多様性に寛容な社会になるために今できることを、皆様とともに考えていきたいと思います。

【講師紹介】



松下 修三（まつした しゅうぞう）

ヒトレトロウイルス学共同研究センター・教授

1955年熊本市生まれ。熊本大学医学部卒業（1981年）。1983年米国国立癌研究所・臨床腫瘍部門研究員として、Samuel Broder教授のもとでレトロウイルスと免疫についての研究に従事。1986年帰国し、HIV感染の臨床と中和抗体の研究を開始した。1987年、熊本大学附属病院輸血部助手、1997年エイズ学研究センター病態制御分野・教授、2015年熊本大学エイズ学研究センターセンター長、2016年国際エイズ学会（IAS）：運営評議員、2013年日本エイズ学会理事長などを歴任。HIVの基礎・臨床研究ばかりでなく、社会科学研究など幅広い研究に従事。特に、HIVを中和する抗体の研究では、世界をリードする研究発表を行った。世界と日本におけるHIV感染症の現状と課題をまとめ、未来社会とのかかわりについて論じる。



渡辺恒二（わたなべ こうじ）

国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター・医師

1977年埼玉県所沢市生まれ。琉球大学医学部医学科卒業（2004年）。琉球大学医学部附属病院での研修を経て、2006年から国立国際医療研究センター・エイズ治療・研究開発センターで、HIVを始めとした感染症診療に従事している。2008年頃より、アメーバ赤痢に関する研究を開始し、国内でアメーバ赤痢が性感染症として流行していること、死亡例が日本で多発している現状を、国内外の専門誌に多数報告した。2015年には、アメーバ赤痢が重症化する原因を究明するため、バージニア大学に研究留学し、世界的権威であるビル・ペトリ教授に師事した。2017年の帰国後も、アメーバ赤痢の重症化機序解明のための、精力的な研究活動を行っている。「性感染症としてのアメーバ赤痢の制圧」、「アメーバ赤痢による国内死亡症例ゼロ」を目標としている。



渡辺 憲司（わたなべ けんじ）

立教大学名誉教授・自由学園最高学部長

1944年北海道函館生まれ。立教大学文学部卒（1968年）日本の近世文学研究者で、江戸時代小説・大名文芸園・遊里史等を専門とする。我が国における「性」の文化構造の特色に触れながら、江戸時代前期の若衆における男色文化などをご紹介いただく。2011年3月、当時学校長をしていた立教新座高等学校の卒業式が中止となった際、卒業生へのメッセージ「時に海を見よ」をインターネットに公開、Twitterをはじめとするネット上で話題となり、合計で80万回以上の接続数を記録するなど、大きな反響を得た。老若男女がこの卒業生へのメッセージに感動・感謝し、賛同の声が寄せられている。近著に『江戸遊里の記憶―苦界残影考』（ゆまに書房、ゆまに学芸選書 ULULA、2017年）『いのりの海へ―出会と発見 大人の旅』（婦人之友社）。テレビ出演はNHK『ブラタモリ』（吉原編、2012年1月12日）他、歴史番組に多数出演。